

英米の大学院の違いと進学先の選択

大学院留学説明会@東京大学 21/07/2019

向山 直佑

オックスフォード大学 政治国際関係学部 博士課程

m.nao.mn@gmail.com

自己紹介

- 読み：向山直佑（むこやまなおすけ）（△むこうやま、△むかいやま、×さきやま）
- 所属：University of Oxford
 - Department of Politics and International Relations
 - St. Antony's College
- 専攻：国際政治学・比較政治学
 - 天然資源と国家形成（脱植民地化）の関係について研究
- 略歴
 - 2011年 東大寺学園高校卒業
 - 2015年 東京大学法学部卒業 学士（法学）（2013年9月-2014年4月 トロント大学に交換留学）
 - 2017年 東京大学法学部政治学研究科修士課程修了 修士（法学）
 - 2017年- オックスフォード大学に在籍

イギリスとアメリカの博士課程の相違点（政治学・社会学）

	イギリス	アメリカ
修士との関係	積み上げ方式	別コース
年数	3-4年	5-6年（分野による）
指導方式	基本的に1人の指導教員との密な関係	コミッティー方式
受験に必要な書類	共通部分* + 研究計画書	共通部分 + GRE
合格の決め手	研究計画書と指導教員候補の意思	推薦状とSOP
ファンディング	保証されていない。自分で獲得する必要。ただし獲得できればTAなどの義務はない。	一定以上の大学なら授業料 + 生活費支給。 1-2年はTA義務なし、3-4年はTA義務あり。
プログラムの概要	1年間授業 → 博士論文	2-3年間コースワーク → 博士論文
ジョブマーケット	アメリカでの就職は難しいとされる	どこでも問題ない
全体として	博士論文を書きに行くところ	トレーニングを受けに行くところ

*成績 + 英語スコア + 推薦状 + SOP + WS + CV

合格後のスケジュール

- 1月後半～2月：合格通知
- 2月～3月：不合格 or ウェイトリスト通知
- 2月～3月：キャンパスビジット（アメリカ）
- 4月15日前後：進学先決定期限（アメリカ）

進学先の選択基準

1. 付きたい先生が複数いる
2. ランキングが高い
3. 資金が豊富
4. 就職実績が良い
5. 他の院生のレベルや相性

進学先の選択基準

- しかし・・・それだけで本当に決められるか？ その他の基準も同じくらい重要。
 - 住みたい国／街（生活環境）
 - 将来計画
 - 直感 ... etc.
 - 上記の点→精神状態⇔研究 人生の選択でもある。
- あらゆる人に話を聞く（決めるのは自分）
- 進学先の選択は迷うもの
 - 「そのような状況だとおそらく正しい選択というものそもそも存在せず、選んだ道が結果的に正しくなるよう頑張るしかない気がします。」
 - "Unfortunately, there is no algorithm for selecting the right graduate program. It is partly a 'gut feeling' decision."

進学先の選択（私の場合）

- 出願12校（アメリカ10校、イギリス2校）
- 合格3校+ウェイトリスト2校
 - アメリカ：ノースウェスタン○、ブラウン○、ジョージタウン△
 - イギリス：オックスフォード○、LSE△
 - アメリカについてはあまり成功していない。ただ政治学・社会学では全滅もよくある。
- ノースウェスタンとオックスフォードに絞って悩む
 - どちらも先生の面では魅力的（わずかにノースウェスタン？）
 - 資金面ではノースウェスタン
 - しかし、自分の研究スタイルはアメリカではマイノリティ
 - エバンストンとオックスフォードだと、圧倒的に後者に住みたい（直感）
 - アメリカでの就職には特別の興味はなかった

リンク

- 英米の出願プロセスの違いについては、米国大学院学生会のニュースレターに寄稿。
 - イギリス社会科学系Ph.D.の出願プロセス:アメリカとの比較から
(http://gakuiryugaku.net/newsletter_content/2017-10.pdf)
- ブログ「紅茶の味噌煮込み」(<http://penguinist-efendi.hatenablog.com/>)に「英米政治学Ph.D出願の記録」(計15記事)を掲載。
 - 概括とタイムスケジュール／イギリスとアメリカの博士課程の違い／お金の話／スコアの話／出願先の選択／推薦状／その他の書類／指導教員候補とのコンタクトと訪問／合否を待つ／合格後に起きること／進学先を決める／英語のチェックについて
- その他の社会科学系PhD出願に関するブログ
 - 木原盾さん(東大→ブラウン、社会学) : Under the Canopy
(<http://underthecanopy2016.blogspot.com/>)
 - 打越文弥さん(東大→ウィスコンシン・マディソン、社会学) : On Sociology (<http://on-sociology.blogspot.com/>)



パネルディスカッション



質問リスト

1. 出願先を選んだ基準
2. 出願校数
3. 現在の進学先以外の国の大学院も受験したか。した場合、なぜその国は選ばなかったか。しなかった場合、なぜしなかったか。
4. 進学先決定の基準
5. (進学済みの方) 進学してみて、進学先が進学前に思っていたのと違う点があったか

1. 出願先を選んだ基準

- 渡辺（UCB）：指導教員候補が複数いる有名大学
- 田主（MIT）：ランキング、自分の研究分野が強いこと、興味のある研究室が複数あること
- 尾花（Caltech）：寒いのが苦手なので西海岸・ほぼカリフォルニア
- 菊池（MIT）：経済学Top10+自分の分野が強い4校
- 広本（OX）：英文科が大所帯で、学びやネットワーク作りの機会が豊富そうなトップレベルの大学
- 向山（OX）：興味を持てる先生が複数いること、ある程度ランキングが高いこと

2. 出願校数

- 渡辺 (UCB) : 米8
- 田主 (MIT) : 米6英1
- 尾花 (Caltech) : 米9
- 菊池 (MIT) : 米13英1
- 広本 (OX) : 英5
- 向山 (OX) : 米10英2

3. 現在の進学先以外の国の大学院も受験したか。した場合、なぜその国は選ばなかったか。しなかった場合、なぜしなかったか。

- 渡辺（UCB）：NO。イギリスも検討したが、現地の奨学金がもらえなさそうだったので出願せず。
- 田主（MIT）：YES、イギリス（ケンブリッジ）。研究自体以外の経験もしたかった、英語のスコアの追加取得を要求された。
- 尾花（Caltech）：NO。アメリカが研究の本場だと思った。ヨーロッパまで手が回らなかった。
- 菊池（MIT）：YES、イギリス（LSE）。不合格だった。
- 広本（OX）：NO。イギリスが好きだった。参照したい資料がイギリスに多かった。
- 向山（OX）：YES。アメリカの研究動向に合わないと思った。住みたいとあまり思えなかった。

4. 進学先決定の基準

- 渡辺（UCB）：合格した3校中、UIUCは田舎すぎて除外。残りのUCBとPrincetonで悩んだが、最終的には自分の専攻分野の先生を見比べて決断した。
- 田主（MIT）：ボストンの魅力 + 関心 + ランキング → HarvardかMIT → MITの方が自分の分野では活気がある。
- 尾花（Caltech）：初めはCaltechでやって行けるか自信がなかったが、せっかく合格したので行くことに決めた。キャンパスビジットで訪問した他の大学の教授さえ、Caltechは良い大学と言っていた。
- 菊池（MIT）：経済学においては世界一の教育機関。教員との距離感、奨学金、治安、物価、HarvardとのCross-registration可能性、NBER(全米経済研究所)の存在など。
- 広本（OX）：自分の研究に資する所蔵資料が多いから。指導教員と研究の関心が似ていたから。
- 向山（OX）：評価が高い + 生活環境 + 指導教員との相性。研究対象が旧イギリス植民地。

5. 進学先が進学前に思っていたのと違う点

- 渡辺（UCB）：TAのdutyが多かった。実際やってみると想像以上に大変だった。
- 田主（MIT）：全体的には想像通り、あえて言うなら思ったよりもエンジニア寄りの大学だった（良くも悪くも）。
- 尾花（Caltech）：アットホームな雰囲気、学生のケアが行き届いている。超優秀なのに謙虚、という人が多い。
- 向山（OX）：アカデミア志望でない人も多い（良くも悪くも）。コースワークがないため、同期や上下との関係を深めるのが容易ではない。4年は意外と短い。